

在日コリアンのメンタルヘルスに 影響する要因の検討¹⁾

— 認知面と行動面から —

李 正 姫*・田中共子**

Identity Perceptions, Behavioral Tendencies as Determinants of Mental Health for *Zainichi* Koreans

Junghui LEE* and Tomoko TANAKA**

This paper clarifies mental health determinants for *Zainichi* Koreans in terms of identity perceptions and behavioral tendencies. We examined Korean and Japanese identity perceptions and the conflict between the two. Behavioral tendencies called *switching*, which means changing behavior according to the culture with which they are interacting, were also investigated. In 2010, 106 *Zainichi* Koreans completed a questionnaire survey. Multiple regression analyses showed: (1) both Korean and Japanese identities significantly negatively contribute to depression, and (2) Korean identity is a significantly positive happiness predictor. *Zainichi* Koreans' positive self-recognition for their ethnic origins should be the focus of mental health efforts.

key words: mental health, Koreans, identity, culture

問題と目的

本研究では、在日コリアンに焦点を当てて、彼らのメンタルヘルス（以降からはMHとする）に影響する要因を認知面と行動面から調べる。認知面については、在日コリアンに関して社会学で盛んに研究されているアイデンティティ（以降からはIDとする）のテーマを心理学的視点から捉え、MHとの関連を調べる。本研究では、韓国人意識・日本人意識・その間の葛藤という3側面からIDをとらえる。在日コリアンは、韓国人とも言い切れず、日本人とも言い切れず、そもそも自分はいったい何者かというアイデンティティの葛藤を体験し、今後の自分たちの生き方

を明確にできないでいると、福岡(1993)は指摘している。在日コリアンの抱く韓国人意識、日本人意識、その間での葛藤は、自分の存在価値への疑問であり、これは彼らのMHと関連すると考えられる。しかし、心理学ではこの集団自体に関する研究が少なく、社会学の研究でも、MHを示唆する誇りや劣等意識の報告(福岡, 1993; 林, 2001)はあるが、在日コリアンのMHそのものを直接測定した研究は見当たらない。行動面については、在日コリアンのスイッチング（以降からはSWとする）という概念を用いる。韓国文化も日本文化も両方持っている在日コリアンは、「日本人と付き合い時は日本人だっていうか、同胞と付き合い時はやっぱり韓国人、割り切っちゃってる」という、相手によって接し方が自然に変わってくるスイッチングメカニズムをもってると、福岡(1993)は指摘している。社会学ではスイッチング現象があるところまでは研究されているが、これが心理的に安定感や満足感を与えるか。逆に精神的いらだちを与えるかは証明されていない。本研究では、2文化人(福岡, 1993)である在日コリアンの行動の切り替え現象について尺度化を行い、さらに、MHとどう関係するかを調べる。

本研究の仮説

本研究では以下の4つの仮説を設定した。

①韓国人意識とうつおよび幸福：在日コリアンのMHそのものを測定した研究は見当たらないが、MHを示唆する自尊心とエスニックIDは正の関連があるという報告(福岡・金, 1997)から、仮説1「韓国人意識はMHにより影響を及ぼすだろう。」②日本人意識とうつおよび幸福：日本国籍を取ることで日本人になれるという「帰化志向」と在日韓国・朝鮮人である自分をいやだと思ふ「民族的劣等感」との間に強い関連があるという報告(福岡・金, 1997)から、仮説2「日本人意識はMHに負の関連を及ぼすだろう。」③葛藤とうつおよび幸福：「葛藤型」の生き方をしている在日コリアンは自己充実感が低いという報告(福岡・金, 1997)から、仮説3「葛藤はMHに負の影響を及ぼすだろう。」④SWとうつおよび幸福：スイッチングすることで「その場の雰囲気ですっと適応している感じ」という指摘(福岡, 1993)から、SWを安定した心理的状态と解釈した。仮説4「SWはMHにより影響を及ぼすだろう。」

方 法

1. 調査対象者 西日本在住の在日韓国人106名(男性58名・女性45名・不明3名, 平均年齢44.6歳(標準偏差16.6))。

2. 質問紙の構成 ①メンタルヘルス うつを測定するため「最近気分が落ち込んでいる」、幸福を測定するため

¹⁾ 本論文は第一著者が岡山大学大学院社会文化科学研究科に提出した2013年度博士論文の一部を加筆・修正したもので、科学研究費(基盤B, 15H03456)の助成を受けた。

* 神奈川歯科大学総合教育部

Kanagawa Dental University, 82 Inaoka-cho, Yokosuka-shi, Kanagawa 238-8580, Japan. E-mail: j.lee@kdu.ac.jp

** 岡山大学社会文化科学研究科

Graduate School of Humanities and Social Sciences, Okayama University, 3-1-1 Tsushima-naka, Kita-ku, Okayama 700-8530, Japan. E-mail: tomo@cc.okayama-u.ac.jp

Table 1 スイッチングの主成分分析の結果

項目	重み
日本人という時は、同胞という時よりも、周りに合わせて行動する	.876
同胞と付き合う時は、日本人と付き合う時よりも、ストレートな感情表現をする	.844
日本人と接する時は、同胞と接する時よりも、遠慮や謙遜をする	.826
日本人という時は、調和を保つため「まあいいか」と考えて、自分の行動を抑える	.819
同胞と一緒にいるのが、男らしさや女らしさを期待して接する	.812
日本人と接する時は、同胞と接する時よりも、はっきりしない言い方をする	.801
同胞が相手の時は、韓国の儒教的な考え方を大事にして接する	.624
日本人とは日本食、同胞とは韓国食を食べる	.563
日本人よりも同胞と付き合う時のほうが、礼儀に気を付ける	.524
説明率	56.83%

「今、幸せな気分だ」のそれぞれ単独の項目を用いた。②アイデンティティ (a) 韓国意識の強さを測定するため「自分は韓国人だと思う」、(b) 日本人意識の強さを測定するため「自分は日本人だと思う」の単独項目を用いた。(c) 葛藤 二文化の狭間にある心理的苦痛を測定するため、主に、社会学の先行研究を参考にして3項目を独自に作成した。例えば、「日本にも韓国にも、落ち着くところがないと感じる」などである。③スイッチング 対人行動における二文化の使い分けに関する11項目を、主に、社会学の先行研究を参考にして、独自に作成した。すべての項目は4件法で測定された(1. まったくそうではない-4. とてもそうである)。

結 果

1. 本研究で新たに作成した葛藤とSWについてそれぞれ主成分分析を行った。その結果、葛藤は3項目の単因子構造で、説明率は56.5%、 $\alpha=.60$ であった。スイッチングは、11項目中9項目が抽出される単因子構造で、説明率は56.8%、 $\alpha=.90$ であった(Table 1)。2. うつと幸福を規定する要因を検討するため、うつと幸福それぞれを目的変数、性別(男性は1, 女性は2)、年齢、韓国意識、日本人意識、葛藤、SW、計6変数を説明変数とする強制投入法による重回帰分析を行った(Table 2)。その結果、うつに対しては韓国意識及び日本人意識のいずれも有意な負の影響をしていた。つまり、韓国意識が強いほど、または日本人意識が強いほどうつの度合いが低くなると言える。幸福に対しては性別と韓国意識の有意な正の影響が示さ

Table 2 うつ及び幸福を目的変数とした重回帰分析の結果

説明変数	目的変数	
	うつ β	幸福 β
年齢	.059	-.015
性別(男性=1, 女性=2)	-.092	.278**
スイッチング	.121	-.061
葛藤	.156	-.078
韓国意識	-.249*	.232*
日本人意識	-.247*	.073
R^2	.166**	.145*

* $p<.05$, ** $p\leq.01$

れた。つまり、男性より女性のほうが、または韓国意識が強いほど幸福感が高くなると言える。葛藤及びSWからMHに対しての有意な影響は見られなかった。以上の結果から、仮説1は支持された。仮説2, 仮説3, 仮説4はいずれも支持されなかった。

考 察

MHに影響するのは、SW的な行動面ではなく、韓国人なのか日本人なのかという認知面であることが明らかにされた。韓国意識が高いほど、日本人意識が高いほど、うつの度合いが低くなること、韓国意識が高いほど幸福感が向上することが確認された。とくに、日本人意識が高いほどうつが低くなることは予想外の結果であった。同質性を重要視する日本社会では(林, 2001)、自分は日本人だと意識することが周りや調和がとれ、うつになりにくいかもしれない。韓国意識は、うつ及び幸福のいずれにも影響をしていることから、ethnic originに対する肯定的な自我像はMHに直接的に関与することがうかがえる。本研究は初期的な研究であり、MHの指標として単独項目を用いたが、精練されたMHの尺度をもって、韓国意識・日本人意識がMHに及ぼす役割を研究することが、今後の課題である。

引用文献

- 林 一圭 2001 在日韓国人の生活と意識に関する研究 岡山県内在住の在日韓国人を中心として 岡山大学大学院文化科学研究科博士学位論文(未公刊)
 福岡安則 1993 在日韓国・朝鮮人—若い世代のアイデンティティ— 中央公論社
 福岡安則・金 明秀 1997 在日韓国人青年の生活と意識 東京大学出版会

(受稿: 2016.5.2; 受理: 2016.10.18)